

昨年行われたプレ展の際の座談会

田村（以下た）：来年の秋に予定されている、三島・パサディナ姉妹都市交流展の時にはアメリカから6-7人参加頂いて、もう少し大掛かりな展覧会になるかと思いますが、今回は特に三島から出展される方々の交流、という意味合いを強めて行うプレ展となります。来年の本展では客観的な方にも入って頂いてシンポジウムが行えればと考えています。今日は搬入の機会を利用して、三島から出展される岡部さん、川合さん、山本さん、渡辺さんにお集まり頂き、三島との関係や、美術家の仕事について少しお話が伺えたら、と思います。どうぞよろしくお願い致します。

岡部さんは地元に住んで活動拠点もほぼ三島ということで、GYOTEN という地元密着の展覧会を8年続けていらっしゃるんですね。また同時に東京での展示もされていますが、三島でのお仕事はいかがですか？

岡部：気分は楽かな、勝手知ったる・・・というところだから東京とは気分は全然違う。お客さんが、顔見知りの人が多いということが大きいですね。小中学校のことも知っている人もいて・・・逆に言えば緊張感がない。それはそれでありがたい。新しい人に見てもらいたいけれど、それはそれであり。三島の人たちの認識が少しずつ変わっていけばいいな、と。

た：岡部さんは、暮らしをしているところでの発表が多く、題材もこの地域、それは自分で意識していることですか？

岡部：そうそれは、撮っている時にリラックスしてられる。どこかに撮りにいくとなると必死になりそうでしょ？素直にいられるから無理して強引に作品を作ろうとしなくても自然に出てきて素直に作品になると思っている。他にあまり行っていないからよくわからないけれど。

た：そうなんですね、三島で撮ることは制作の姿勢にもつながっているのですよね。川合さんはいかがですか？三島で制作をして、発表は東京が比較的多いんですね。その辺はどうですか？

川合：三島は岡部さんに比べれば最近なので笑 大学を出てからなので、地元、という感覚は正直言っていないですね。三島は制作する場所で発表する場所は東京、全然違う、ということですね。

た：三島で暮らしていて、インスピレーションを得るとか三島でなかったらこれは繋がらなかった、ということはあるですか？

川：あります。都会に住んでいると向こうからいくらでもくれるから、僕なんかは散歩しているだけで大きな刺激を受けて充足してしまう。三島では自分で少し広げたい、小さいものを広げたいという感覚もあって。最近はちょっと違いますが、当時はスピード感から離れて制作するというのに三島はぴったりだったような気がします。

た：川合さんの作品のテンポというか時間感と三島が合っている、ということですね。後のお二人は三島出身で関東方面にいらっしゃるんですよね？渡辺さんは遠くにいても三島を意識していらっしゃるのか、それとも？

渡辺：川合さんと反対な感じで地元っていう感じがするんです。制作というより休みに帰ってくる、というかんじですね。正月も帰ってくるし、そうですね、東京で今やっている仕事は逆に、洞穴に入るような感じかもしれませんね。洞窟というか。周りに友達とかはあまりなくて、展覧会のオープニングなどで会って、また頑張ろう、みたいなところはありますけれど、基本洞穴。近所づきあいもないし、大学卒業して続けている人がいなくて、点々と散らばっているの、それで疲れ果てて、三島に癒しに帰ってきて、三島大社とか、母校の三商とか沢地の方をランニングしてゆっくり走ったりすると川場の風とか緑とかあって、そうすると子供の頃を思い出して、癒されて。東京でまた、戦うというか、揉まれても大丈夫、という風に戻れるのかもしれないですね。

た：そうなんですね。故郷に戻ることでリセットされてまた洞窟に戻る、という感じなんですね。興味深いですね。山本さんは一度仕事をされて、それから東北の美術系の大学に行かれたんですね。

山本：卒業してから働いて、それから大学に行って、三島は行ったり来たりです。自分もどちらかという三島には癒されに帰るという感じで。のんびりしてしまう性格なので東京のように周りが騒がしい方が焦るといふか、そういう感じになりますね。アイデアとかスケッチとかゆっくり考えたいときは地元の方が、という感じなのでその時の心境に合わせてできるのは大きいと思いますね。

た：三島にいらっしゃる川合さんは、ゆったりした時間感を味わっているとのことでしたが、お仕事の時やはり籠もられますか？

川合：そうですね、基本籠ります。

た：岡部さんは写真をされているから、外に出て行きますね。

岡部：そうやって出ていかないと、ずっとうちにいることになって（*岡部さんは市内で旗制作の工房を運営）、切り替わりがないから。そこで寝て仕事して。出るとなると撮影、そうやって出ないと今日の天気を知らなかったり。東京とか三島とかで切り替えられる、三島はふるさとじゃないですか？僕はずっといるので、故郷ではないから。そうやって切り替えができるのは羨ましい。全部が目の前。工房も作品も、暮らしも混ざっているから、羨ましい。だからダラダラしているわけですよ笑。

た：おっしゃる通りですね。制作の時は集中することが必要だけど、切り替え、というか、別のステージから自分の制作を顧みることも重要ですね。岡部さんは代々続いている染色のお仕事をされるのと同時に作家をされて、先ほどの GYOUTEN をまとめたり、市からの依頼の仕事など広範囲に動いていますね？

岡部：あまり写真家という意識はしないで何か作っていらればいかなって。変わってきた、考え方が昔に比べて。

た：ところでアーティストの仕事の領域について、現在大きなプロジェクトに向かって彫刻家の方達と一緒に仕事をしている山本さんはどうお考えですか？

山本：作家で食べている人の考え方をまじかに見る機会が多く日常的にそれを見ることができるのが大きいですね。どういう風に制作をして、生活をするのか、というのがリアルに見られる。結構刺激的で、作品を作るだけでなく総合的な能力の大切さを痛感している。自分がもともと人と関わるのが苦手なタイプなので、そういう根っこから考えが変わってきた部分はありますね。できるだけ人と会うようにして会話しています。以前は締め切りが近いと友達と遊ぶこともしなかったのですが、そういうところに行くとかやる気が湧いてきたりとか、人から得るものが大きいな、ということを感じているので。今の仕事をしていてもお客様との関わりがすごく、そこから得る大切さというのは感じていますね。

た：お客様との関係というのは双方にとって貴重なことのひとつですね。

少し話は変わりますが、美術に馴染みのない方に対してはどんなスタンスですか？

川合さんは先生をしていらっしゃいますが、あまり美術に興味のない方に言うておきたいというようなことはありますか？

川：ああだろう。興味がない人に？あまり必要とされていなくてもずーっとあるよ、というのがアートの存在なので。必要な時がきたら、ずっとありましたよ、っていうのが好きなんですよね。ずっと、気づかなくてもここにあったんだよっていうのが。気持ちが変わって気づいた、みたいな。だからあまりこうです、という風に言う気持ちがどんどん失せているというか。

た：そうですか、でも今のフレーズを聞いたら、きっとああそうか、今はあまり必要としていないけれど、いつの日かそういう日が来るのかもしれない、と思う人が出てくるかもしれませぬね。

川合：と思う人はすでに興味があるんじゃないですか。そこまで日常の中で頭が回らないという気がして。他に楽しいことが沢山ありますからね。

た：そうですね、美術は楽しさを求める人にとって優先順位の高い選択とはならないことを、私も感じています。ところで、美術の時間が学校でどんどん減っていますよね？子供達がものをつくったり美術に接する時間が少なくなっている。そのような中、何か自分ができることはないのか、というような思いはありますか？渡辺さんも先生をしていらっしゃいますが。

渡辺：この前昭和公園で展覧会をやったときに、集まった人たちが、公募団体に所属している人とか、ヒエラルキーがくだらないから、捨てて、やりたいこと、湧き出て来るもので何か作ろうよ、ということで

全く美術家を通らないような記念公園でやったりしました。みんなすごく面白い作品だし、コンセプトとかも面白いし、影響を受けて。一人面白い人がいて、美術教育も先生が受けるように、デザインと美術の違い、先生もお客さんというか、なんというか、それに受けるものを提出する？と言っていて、そもそも美術は上手い下手ではなくて、衝動とかやりたいことを表現することだ、と言っていたんです。確かにそうだよなって。美術の授業も破天荒な授業、そのままがいいんですよ、みたいな。それが美術の役割というか、自分で物事に価値をつけたり判断したりするから、そうすると色々好き嫌いを自由にいう人が増えてくると面白いなど。美術の授業はその人から出てくる衝動を、もっと出していいよということが重要な気がして。そうすると面白い人たちも増えて、出てくるものでいいんだというような。

た；美術の授業の時間数が減っても、内容が変質していけば子供達にも届くのではないか、といまお話を伺いながら思いました。私ごとになりますが、高校時代に出会った美術の先生、美術大学で鍛金を学ばれていた方に衝撃のようなものを受けました。友人と二人で小さな掃除用具室でいつもいつもおしゃべりしながらスケッチをしていたのですが、それを全く咎めることなく許容して成績もついてきた。他の教科なら、いつも同じ場所で同じように話し込んでばかりいて、と言われるはずですが。その時に、美術をしている人の特殊性を強く感じました。美術家の人たちが当たり前と思っている態度や考え方に触れるだけで、何らかの影響を与えられる人もいる、と思います。特にこれから、人にしかできないことは何か、と考える時代になってくるとますます美術家の仕事は必要になってくるように思います、ぜひ籠りの時間の合間に、外に出て、多くの人に会って話をしてみたいと思います。最後に、この二、三年でしたいこと、ご計画などを教えてください。

岡部：計画はないけれど、東京でもぼちぼち個展ができたかなあと思っています。制作としては、作品が少し動き出すきっかけのようなことがあったので、その辺を少し突っ込んでみたいと思っています。2-3年は生きてるといいな笑

山本：大掛かりな仕事が2020年に集中していて、ギャラリー善さんでも個展があり、こちらの本展もあります。体力があるうちに頑張って2020年を駆けぬけようかな、と思います。

川合：(善さんでするのは)何月ですか？僕も20年だ。うーん、これから2-3年ですか？まだ発表したことのない土地でやってみたいですね。自分の地元が関西なので、そちらでもやってみたいですね。地元でやるのは、皆さんが三島でやるのと同じようなことですね。

渡辺：今年の9月に善さんでやるので、東京で採まれたその成果を三島で発表できればと思います。大作も溜まってきているので、それを三島の人たちに見てもらいたいですね。作品も変わってきて、決していい状態ではないのですが、気が楽になってきて、たくさん描いていくのもと思っています。また文化庁などに支援してもらってドイツとか滞在して博物館を回ってみたり、取材をしたり、制作を少しでもする、ということを経験してみたいです。

た：来年の本展の頃は皆さん忙しそうですが、楽しみにしております。